地域に根差すということ

園長　野中　泉

このところ、少し仕事が立て込んでいて、首や肩がカチコチに凝ってしまってどうしようもなくて、近所の整骨院に駆け込みました。初めての整骨院でしたが、身体だけでなく気持ちもクタクタで、電気をかけてもらったりしながらボンヤリしていたら、「立ち入ったことを、お聞きしますが、もしかして、福井からアトムにいらっしゃいましたか？」と首を揉んでくれていたおじさんが、オズオズと、でも我慢できずにというように声をかけてくれました。聞けば、無認可時代のアトムを卒園した保護者だということ、私の保険証を見て声をかけてくれたようです。福井からアトムに新しい園長が来たらしいという噂を聞いていたのだという彼は、その後こんなふうに続けました。「何十年も前に卒園した私なんかは、本当はもう何の関係もないのかもしれないんですが、それでも、今、アトムがどうなってるかは、ずっと気にかかるんですよ。正直に言うと、自分の子を保育園に入れた当初は、保育園なんてのは、子どもさえ機嫌よく通ってくれさえすれば親には、とくに父親の自分には関係のない場所だと思ってたんです。でも、ある日、うちの家内が『なんか、父親懇談会っていうのがあって、担任のハセちゃん（現在：志賀保育士・つばさ共同保育園）がお父さんにも来てほしいって言ってるよ』と言うんで、なんだろうと思ってちょっと顔を出した。そしたら、はまっちゃったんですよね（笑）。その頃出会ったお父さん仲間とは、卒園して何十年たった今でも、ずっとつきあっている。まさか、子どもの保育園で、自分の一生の友だちに出会うなんて、思ってもみなかったですよ。園長のおっこちゃん（現在：市原理事長）にもね、そりゃあもう、人生のいろんな場面で助けてもらってね、だから、私なんかが心配することじゃないと思っても、アトムのことは他人事に思えないんですよ」。身体をほぐしてもらいながら聞いたおじさんの話は、同じように疲れてカチコチに固まっていた私の気持ちも柔らかくほぐしてくれるようでした。

その少し前、こんなこともありました。徒歩で仕事にむかっていた私は、アトムの前の歩道橋で登校途中の小学生の一団とすれ違ったのですが、その中のひとりの男の子（たぶん、2 年生くらい）が傘を振り回して走っていて盛大に転んでしまいました。運よくか悪くか身体より先に道路についた傘は無残に骨が折れて、折れた骨は傘のビニールを突き破る大惨事。知らない子だったのですが「大丈夫？怪我しなかった？傘振り回して走ってたら危ないで。折れた傘みせてごらん」と声をかけました。でも、傘をふりまわして走っていたうしろめたさと、一瞬で傘が大変なことになったショックと、突然、知らないおばさんに声をかけられた驚きと、すぐには受け止められないモロモロで顔をこわばらせて固まってしまった彼。「まあ、当然だな」と思ったその瞬間、3，4 人の見たことのある顔の子たち（卒園児）が、私と彼を取り囲みました。「大丈夫やで、この人な、アトムの人やから」「そうやで、アトムの人やから、大丈夫なんやで」そう口々に彼に言ってくれる子どもたち。そして、なんと『アトムの人』という謎の呪文の威力で、あっという間に『知らないおばさん』から、『大丈夫な人』に昇格した私に、彼は折れた傘の応急処置を任せてくれたのでした。

その場所が、地域に根差すとはどういうことか。それは、地域に「その場所」のことを自分事として気にかけてくれている人たちがたくさんいるということ。そして、「その場所」はいざという時には頼りにできると、信頼してくれている子どもたち（大人たち）がたくさんいるということ。

ごく短い間に、続けて遭遇したこのふたつの出来事は、100 万語の立派な言葉より饒舌に、そして確かに、アトムという保育園が何十年もの長い年月をかけて、地域の人たちとどういう関係を重ねてきたのかを、私に（福井から来たばかりの園長に）教えてくれている、そんなふうに感じました。